

どうしても慣れない習慣のひとつに、チップというものがある。サービスを受けたときに払うお金のことであるが、日常的にこれが習慣である国や地域と、そうでないところがある。私が生まれて育って暮らしている日本では、基本的にはない。だから、チップについては感覚的にとらえがたいところがある。

チップの習慣がある国を旅する際にガイドブックを読むと、いつ、どんな場で、いくらくらいのチップを払うべきかが書いてある。はつきりいくらと書いてあると、ほっとする。私にとって難しいのは飲食店だ。会計の際レシートを確認してサービス料が含まれていたらチップは不要、とか、合計金額の二五%を支払うべし、とか、こまかい文字のレシートをチェックするのも面倒なら、合計金額の二五%を割り出すのも、数字の苦手な私には一苦労だ。

もともと難易度が高いのは「心地よいサービスを受けたらそれに見合ったチップを払えばよい、そうでないならチップは不要」というアドバイスだ。旅先の、はじめて訪れた町の、はじめて訪れた店の対応の、良し悪しがわからない。しかもそれに「見合った」額などと言われると、なんだかおろおろしてしまう。

チップを支払う際もスマートに振る舞えない。コインなり紙幣なりをさっと出そうと思いつつ、入れておいたところになかったり、財布を出し



絵・江口修平

スマートにできない

角田光代

てこまかい金額がないと気づいたりして、「あつ、いや、ちょっと、あの」などとしどろもどろになったこともある。そうしてやっぱり、コインであろうと少額であろうと、何にも包まれていないお金を見知らぬ人に手渡すことに、ちょっとした抵抗がある。渡さないほうが見苦しい場合もあると頭ではわかっていながら、この抵抗はなかなか拭えない。

少し前に、仕事で上海を訪れたのだが、みごとなキャッシュレス化に驚いた。みんなスマートフォンにアプリを入れて、レストランでメニューを見るにも注文をするのも支払いをするのもそれを使っている。タクシーを呼ぶのもアプリだし、電車の予約などもアプリだという。私も、コーヒーショップに入ってふつうに注文したところ、「アプリがないとうちでは注文できないんです」とお店の男の子に言われてびっくりした。アプリを持たない私は現金の使えるお店しかいけなかったのだが、ふと、チップってどうなっているんだろうなあ、と思った。クレジットカード払いと同じように、そのアプリにはチップ欄があるのだろうか。もし、チップ専用のアプリがあって、いくら払うかの判断も計算も、ぜんぶやってくれ、自動的に払ってくれるのだったら、もしや私にはたいへんありがたいのかもしれない、などと考え、その前に、電子マネーやアプリ関係に詳しくならなければならぬことに気づいた。

かくた・みつよ●作家。1967年生まれ。1990年『幸福な遊戯』でデビュー。主な著書に『対岸の彼女』『八日目の蟬』など。近著にエッセイ集『いきたくないのに出かけていく』など。



撮影：垂見健吾